The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代社会における権威主義的態度尺度の有用性 : 環境保護意識、ヘルス・コンシャスの分析視角として
Author(s)	吉川, 徹
Citation	ソシオロジ. 1994, 39(2), p. 125-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

●研究ノート

現代社会における権威主義的態度尺度の有用性

——環境保護意識、ヘルス・コンシャスの分析視角として——

吉川　徹

権威主義研究の現状

権威主義的性格が社会学において関心を集めてきたのは、近代（大衆）社会の社会過程におけるその位置づけの重要性による。この分野の古典的研究としてあまりにも著名な『自由からの逃走』(Fromm:1941)においてフロムは、一九二〇～三〇年代のドイツの政治・経済的要因や社会関係という可視的な社会背景と、ナチズムという厳然たる歴史的事実を媒介する位置に潜在する、心的要因（社会的性格）として、権威主義的性格を導出している。さらに、その後のアドルノらのバークレー・グループの緻密な研究（Adrno *et. al.*:1950）では、権威主義的性格は、一部の社会集団だけに極端にみられる性格類型ではなく、社会全体に遍在する大衆の心理であることが強調される。またこの研究では膨大な試験的検討の蓄積によって、権威主義的態度の尺度（いわゆるF－スケール）が構成され、これが社会心理学的な権威主義研究の端緒となっている。さらにその後の数多の研究の蓄積の結果、権威主義的性格は、単に歴史的事実への心性からの先鋭な切り口として高く評価されてきたというだけではなく、歴史的文脈を離れても独自の意義をもつ、大衆社会論の中核概念として定位されるに至っている。こうした権威主義研究の一連の流れについては、すでに曽良中によって詳細に研究・紹介がなされて久しく（曽良中：一九八三）、いまさらあらためて語るべくもないだろう。

このように権威主義的性格には、近代（大衆）社会の社会構造と、反民主主義的な社会現象①を媒介する心的要因として、近代（大衆）社会の病理性を啓発する使命が与えられてきたという経緯がある。つまり近代（大衆）社会における反民主

主義的な社会現象の生成過程に位置付けられてこそ、本来の社会学的な示唆を見出しうるものと想定されてきたわけである。ところが現代日本社会では、急進的で暴力的なファシズムの脅威は、権威主義的性格が導入され注目された当時（城戸・杉：一九五四）とくらべれば、明らかに希薄化しており、「大衆社会」という社会認識は名実ともに過去のものとなりつつある。そのため、潜在的で微妙な予兆をとりたてて強調すれば別だが、「病理的」といいうるほど顕在的で重大な反民主主義的社会現象を見出すことは、もはや難しい。したがって、時空を超えて、ワイマール政権下のドイツや一九五〇年代のアメリカ社会と同一の理論展開で、現代日本社会に生起する事象を分析したのでは、リアリティを十分に把握することはできないだろう。とりわけ、社会の趨勢を鋭敏に記述することを目指して計量的手法を用いるわれわれには、この分野の理論とリアリティの乖離は、あたかも微熱の患者を集中治療室に入れてCTスキャンを撮っているかのように、「的外れ」な印象を与えるのである。そして実際に、権威主義的態度や（権威主義を中核とした）伝統的価値を手掛かりに、政治的な意識や行動の解明を試みた一九八〇年代の実証研究（綿貫：一九八六、直井：一九八八、直井・徳安：一九九〇）では、必ずしも原典で論じられているような劇的な効果が検出されているわけではない。[2]

このような当該社会の現状のため、数々の実証研究の蓄積によって鋭利な刃物のように砥ぎ澄まされた権威主義的性格という基礎概念や、それを社会心理学の方法で計量的に操作化した権威主義的態度（尺度）も、現代社会にあっては十分な説明力を発揮しきれないでいる。言い換えれば、いくら見事な道具がそろっていても、いまや、この概念を用いて「斬る」べき所定の宿敵はすでに猛威をふるってはおらず、かつてのように簡明な論理の下に、鮮やかに社会の病理性を「斬る」ことは不可能に近いのである。

しかし一方で、研ぎ澄まされたこの分野の諸概念、とりわけ権威主義的態度（尺度）を、社会状況の変化や学問上の潮流にしたがって、二〇世紀の遺物として蔵入りさせてしまうのは、あまりにももったいなく思われる。そもそも社会意識研究において、深層心理メカニズムまでも包含した、精緻な理論的バック・アップがこれほどしっかりと存在する概念が、ほかに多く見出せるであろうか。

また、社会調査データの計量的研究では、社会的属性を測定する項目（フェイス・シート項目）の形態や操作法には、研究の蓄積によって（職業威信スコアや産業分類に代表されるような）一定の「規格」といいうるものがあるのに対し、意識項目には、これらに匹敵するような、統一された測定法は多くは見出せない。しかし、こうした中にあって、Fスケールに端を発する権威主義的態度（尺度）は、数少ない「定番」の操作概念であり、研究の整合的蓄積を可能にしている。

さらに通常、意識項目は「ある社会関係によって○○意識が形成される」というように、目的（被説明）概念として社会的属性との関連を検討されるものであるが、権威主義的態度（尺度）は前述したとおり、社会過程における媒介的な機能を想定されうる意識概念である。したがって、表出的な態度や行動に至る、潜在的な動因としてこれを位置付けることにより、「意識で意識を説明する」という社会学における計量研究としては他にあまり例を見ない、特異な解釈上の構図を設定することが許される。

以上のような判断からこの小論では、一連の権威主義研究において操作概念として開発された、権威主義的態度（尺度）を用いながら、権威主義的性格をめぐる古典的研究が築きあげた遺産的な概念装置の現代的意義を検討してみたい。

問題設定

さてそれでは、現代社会においては、権威主義的態度（尺度）で一体いかなる社会現象を有効に「斬る」ことができるのだろうか。ここではこの概念に課された、反民主主義的社会現象を扱う、という本来の重責を取り払って、もう少し現代的な問題を「ためし斬り」してみることにしたい。

説明する社会現象は、ある意味では何でもよいのだが、ここでは本来の問題設定とは一見かけ離れた、現代的なトピックである「環境保護意識」と「ヘルス・コンシャス（健康の維持・増進についての関心）」をとりあげる。周知のとおり、両者はともに、クオリティ・オブ・ライフを追求する態度であり、現代の社会意識に特徴的な傾向である。そして「エコロジー」、「ダイエット」、「ヘルス・ケア」などの言葉や、環境破壊や資源の枯渇に対する危機的なイメージ、あるいは老化防止・成人病予防や健康・体力の維持、体型への関心の高まりなどは、表向きはマス・コミによって伝達されて、ブームと呼ぶにふさわしい風潮を呈している。しかし、これらが昨今のような日常生活に根差した社会現象として立ちあらわれたのは、現代人の何らかの心性に適合しているためであると考えられる。そこで、これらの社会現象に権威主義的性格が心理的基盤を与えている可能性を検討するわけである。一見してわかるとおり、基本図式としては、権威主義的な社会的性格をもつ人々が、ファシズムの政治的宣伝に引き付けられやすい、という原典の理論のアナロジーとなっている。

権威主義的性格は元来、こうした風潮ともいいうるような大衆的な社会現象の動因として機能するとされてきた。ただし、ここで扱う権威主義的態度（尺度）は、性格類型ではなく尺度である以上、ある社会集団を一方向に猛進させる心理的動因ではなく、社会全体に遍在し、《権威主義》と対極の《反権威主義》の双方にゆるやかに分布の裾野を広げる概念とみなされる。それでは、《反権威主義》とはどのような方向性なのだろうか。この方向性は、アドルノらのバークレー

・グループの研究では「民主的性格」とされ、その後のコーンらの研究（Kohn and Schooler:1983）では「自己ー指令的志向性（self-directedness）」と呼ばれているものである。コーンによればこの方向性は、「自分自身の規準に基づいて行動し、外的な諸要因のみならず、内的なダイナミズムにしたがい、オープン・マインドをもって他者を信用し自分自身に道徳的基盤をもつ」志向性（Kohn:1981）として定義される。そして、この志向性が現代社会の「健全」な価値とみなされていることは、極めて明白であろう。

したがってさらに正確にいうならば、ここでの問題設定は、環境保護意識やヘルス・コンシャスが、権威主義的態度（尺度）と関連しているかどうか、さらに関連しているとすれば、権威主義的、自己ー指令的のどちらの方向がその動因として作用しているかを測定的に明らかにすることである。③

データ

今回分析に用いるのは、一九九一～九二年に、大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法研究室が郵送法によって実施した調査のデータである（研究代表者：直井　優）。対象母集団は、全国の成人男女である。この調査のサンプリングは層化多段抽出法によって行われ、抽出された対象者八、七六二名に約一年の間隔をおいて、二度にわたって調査票を配布し、このうちの一、二五二名から有効回答を得ている。そして、以下ではこの有効回答を分析する。なお、この調査の詳細については、直井（一九九三）を参照されたい。

社会的態度の測定（主成分分析）

これからわれわれが注目しようとしているのは、権威主義的態度、環境保護意識、ヘルス・コンシャスという三つの社会的態度である。そこでまず、意識の計量的研究で一般に行われるように、主成分分析によってそれぞれの社会的態度の尺度を構成する。

権威主義的態度

はじめに、権威主義的態度であるが、権威主義的態度に関する質問項目はこの調査では合計六項目あり、これらはいずれも「賛成」から「反対」までの五分位でたずねられている。この項目設計は八五年ＳＳＭ調査の「権威主義的伝統主義」の質問項目とほぼ同一のものであり、現代日本社会において繰り返し用いられてきた既存の尺度である。④質問項目は左記のとおりである。

Ａ－ａ　権威ある人々にはつねに敬意を払わなければならない。

Ａ－ｂ　以前からなされてきたやり方を守ることが、最上の結果をうむ。

Ａ－ｃ　子供のしつけで一番大切なことは、両親に対す

る絶対服従である。

A－d 目上の人にはたとえ正しくないと思っても従わなければならない。

A－e 伝統慣習にしたがったやり方に疑問を持つ人は結局は問題を引き起こすことになる。

A－f この複雑な世の中で何をすべきかを知る一番よい方法は、指導者や専門家に頼ることである。

ここではこれら六項目に主成分分析を行ない、第一主成分を権威主義的態度として抽出し、さらに因子得点を用いてこの概念を尺度化した。分析の詳細については本文末の付表1を参照されたい。

環境保護意識

自然環境や天然資源の保護は近年、われわれの日常生活に定着しつつある生活様式である。田中は、環境社会学として扱われる対象が、「一般的」な認識の変遷に伴って近年、従来の「公害（問題）」から、より広域性が高く、慢性・軽度の被害をもたらし、被害者・加害者を特定しにくい現象を扱う「環境問題」へと変遷したことを指摘する（田中：一九九三）。これは、環境破壊の具体的事例の変容もさることながら、現代社会全般を覆う環境保護意識の高まりに下支えされた変遷とみることができるだろう。しかし環境問題自体がこのように、比較的新しい社会現象であることもあって、環境保護意識の形成過程についての精緻な研究報告は今のところほとんど蓄積されていないようである。

さて、環境保護は現代社会においては、いまやほとんど否定されることのない価値となっているので、もし何のコストも払わずに、手放しで環境や資源を保護できるのであれば、だれしもそうしたいと望むに相違ない。そのため、もしも「自然環境の保護は重要だと思いますか」というような質問をしたならば、ほとんどの人が「まったくそう思う」と回答することは容易に想定できる。しかし、環境保護が問題となるのは、よりよい生活の質としての環境の獲得が、産業社会の効率や利便性とトレード・オフの関係にあり、人々に何らかのコストを強いるがゆえである。したがって、この問題について人々が、このトレード・オフの関係のどのあたりに均衡点をおいているか、ということが注目すべき論点となるだろう。そこでこの調査では、環境保護のために人々がどの程度コストを払ってもよいと考えているかをたずねる形式の質問項目を新たに設計して、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の四分位をもって対象者にたずねた。質問文の構成は左記のとおりである。

E－a ゴミ減量化に役立つのであれば、ゴミ処理の有料化もやむを得ない。

E－b エネルギー資源保護のためなら、便利さや快適

さを犠牲にしてもかまわない。

E－c 森林や海水、湖水などの自然環境を守るためなら、便利さや快適さを犠牲にしてもかまわない。

E－d 地球温暖化やオゾン層破壊を防ぐためなら、便利さや快適さを犠牲にしてもかまわない。

E－e 野生動物の絶滅を防ぐためなら、便利さや快適さを犠牲にしてもかまわない。

これらの五項目についても、権威主義的態度と同様の手続で主成分分析を行ない、やはり寄与率の高い第一主成分を抽出している。そこでこの第一主成分を因子得点によって尺度化し、環境保護意識を構成した。詳細については、本文末の付表2を参照されたい。

ヘルス・コンシャス（健康に対する関心）

自分自身の健康に対する関心の急激な高まりは、環境問題と並んで現代的な社会現象である。こうした社会現象に伴って、傷病や疾患に関心をおいた医療の観点ではなく、より積極的な生活の質としての健康に観点をおいた、保健社会学という固有の分野が形成されつつある（園田：一九九三）。しかし、健康に対する関心が「健康ブーム」といわれるほどの急速な高まりをみせていることについて、その心理的な動因を検討した研究はやはりそれほど多くはない。

諸個人の健康も環境と同様に、全くコストを払わずに維持・増進できるものではなく、（金銭的・時間的な）資源とのトレード・オフの関係で獲得される生活の質であると捉えることができる。そこで、この調査では、左記のような質問項目を新たに設計し、前項と同じ四分位で健康に対する関心を測定した。

H－a 肥満を防止するためなら、お金や時間をかけてもかまわない。

H－b 現在の体力を維持するためなら、お金や時間をかけてもかまわない。

H－c 健康をたえず増進するためなら、お金や時間をかけてもかまわない。

H－d 成人病を防いだり克服したりするためなら、お金や時間をかけてもかまわない。

H－e 老化を防ぐためなら、お金や時間をかけてもかまわない。

そして、これら五項目について前二者と同様の分析法で検討して得られた第一主成分は、ヘルス・コンシャス（健康に対する関心）として尺度化されている。やはり詳細については本文末の付表3を参照されたい。

なお、環境保護意識とヘルス・コンシャスは、どちらも脱－産業的な価値であり、生活の質の回復を目指すものである、という表面的な共通点が見出せる。だが、同時に両者には、

環境保護意識が、広範なパースペクティブに立脚し、社会全体の秩序と利害についての判断に基づく意識であるのに対し、ヘルス・コンシャスは諸個人の生活様式についての個別性の高い心的準備状態である、という差異があることをここで確認しておく必要があるだろう。

概念間の関連の検討（相関係数と偏相関係数）

ここまでの手続きによって、われわれは分析対象となる概念を、計量的に操作可能な社会的態度の尺度として獲得することができた。引き続いて、これら三つの概念の間にいかなる関係が見出されるのかを相関係数から検討していく。

図1はこれらの態度因子変数の間の相関関係を示したものである。図中の（単）相関係数は全て一％水準で有意な値となっている。この図からは、権威主義的な傾向が弱い（つまり自己ー指令的である）ほど、環境保護意識が高い（-.145）が、その一方で権威主義的な傾向が強いほどヘルス・コンシャスの度合も高い（.183）、という結果となっていることがわかる。しかも、環境保護意識とヘルス・コンシャスの間には環境保護意識が高いほどヘルス・コンシャスの傾向が強い、という正の相関関係（.180）があるのに、両者と権威主義的態度との間には、これとほぼ同様の大きさの相反する符号の相関関係があるのである。

ここで検出された相関関係を一体どのように解釈すればよ

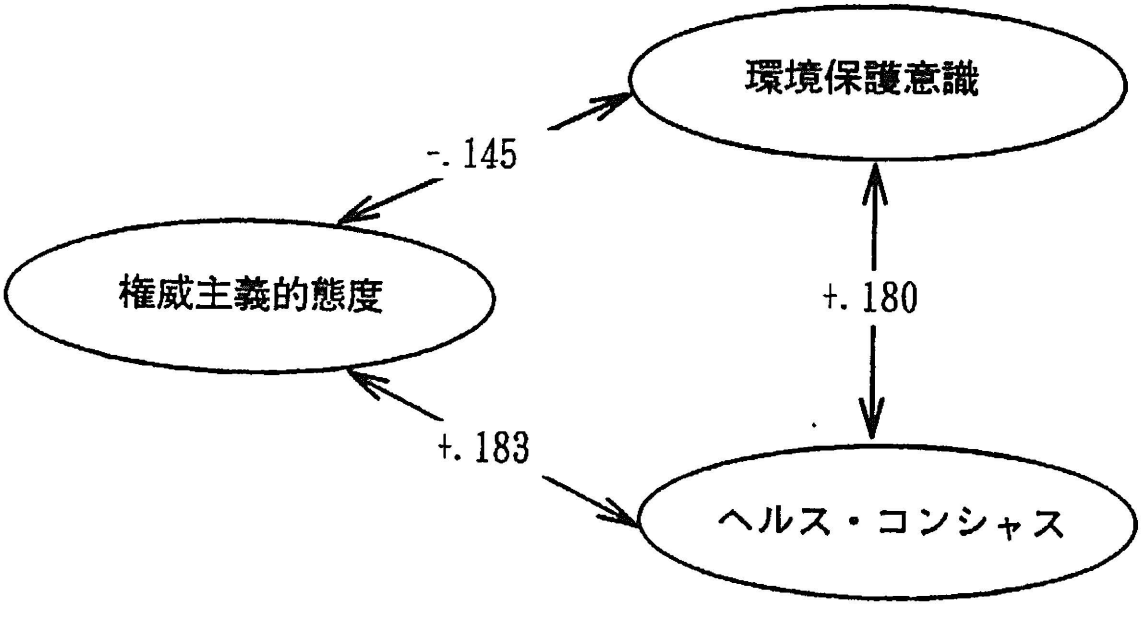

図1　社会的態度尺度間の相関係数

いのだろうか。こうした相関関係を生じる理由として、はじめに考えられる可能性は、ここで検出された相関係数が、社会的属性の影響による擬似的なものなのではないかということである。権威主義的態度などの社会的態度は年齢や性別、教育年数、あるいはその人の社会階層上の地位によって形成されることがすでに明らかになっている（吉川：一九九二）。仮に、環境保護意識やヘルス・コンシャスも同様の過程で、つまり教育年数や年齢・世代、あるいは階層的地位を要因として形成されているとするならば、権威主義的態度とその他の変数との間の関連は、形成要因を共有することによる擬似相関である可能性が考えられることになる。もっと具体的に例示するならば、高学歴層が反権威主義的で、同時に環境保護意識も強い、あるいは低学歴層でその反対の現象が生じている場合には、学歴による擬似的な関連が本質的な部分であって、両概念間には実は直接の共変関係はない、という可能性が考えられるのである。

そこで次に、こうした擬似相関をもたらす可能性のある社会的属性をコントロールして、上記の三概念間の偏相関係数を算出してみることにした。偏相関係数は、他の要因による影響をとり除いた上での共変動の強さと方向を示す係数であり、概念間のより直接的な関連の存在を確証するものである。コントロールすべき社会的属性としては、年齢、性別、教育年数、社会階層上の地位の四つを考えた。ただし、このデータのように、成人男女を同時に分析する場合には、専業主婦や共働きの女性の社会的地位の評価が難しい、という問題があり、職業的地位を男女に共通した指標とするのは適切ではない。そこで、性別にかかわらず共通に扱える階層変数として、対象者の家庭の経済状態を表す指標である世帯収入（本人の年収と配偶者の年収の加算額）を分析に用いることにした。

こうして「年齢」、「性別」、「教育年数」、「世帯収入」の四変数の効果をコントロールして算出した偏相関係数は、図2に示されている。ところが、数値を検討してみると、これだけの変数をコントロールしてもなお、権威主義的態度、環境保護意識、ヘルス・コンシャスの三概念間の相関関係は、単相関として算出された数値と大きくは異なっていないことがわかる。（権威主義的態度と環境保護意識の相関関係が－.145→－.132、権威主義的態度とヘルス・コンシャスの相関関係が.183→.159、環境保護意識と権威主義的態度の相関関係が.180→.168、全て一％水準で有意な値）。

この分析結果からようやくわれわれは、確信をもって結論に至ることができる。それは、三つの社会的態度の間に検出された、「権威主義的であるほどヘルス・コンシャスの傾向が強い」、「自己－指令的（反権威主義的）であるほど環境保護意識が高い」、「ヘルス・コンシャスの傾向が強いほど環境保護意識も高い」という相関関係が、社会的属性の影響によ

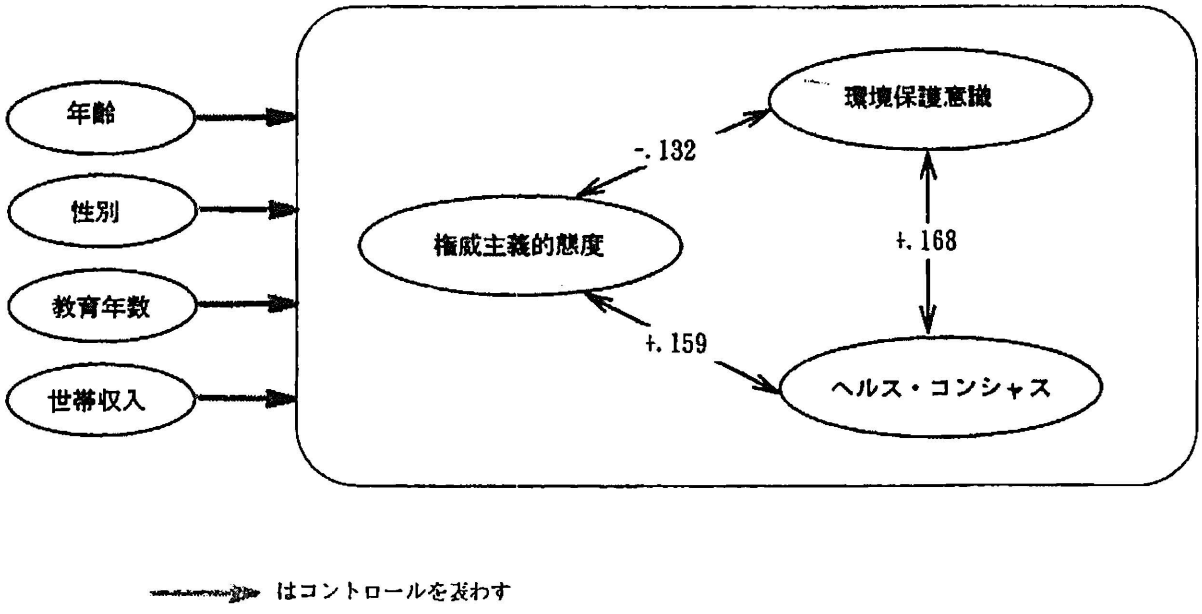

図2　社会的属性の影響をコントロールした社会的態度尺度間の偏相関係数

る擬似的な共変関係ではなく、主としてそれぞれの社会的態度間の直接的な関連であるということである。

より踏み込んだ解釈をするとすれば、権威主義的態度と他の二概念の間に検出された関連は、権威主義的態度の規定的な影響力による、因果関係に基づくと考えることができるだろう。なぜならば、環境保護意識とヘルス・コンシャスは、社会的行為に直結した、権威主義的態度よりも表出的な心的準備状態であり、それに対して権威主義的態度は、より潜在的で基底的な諸個人の性格特性であるからである。[5]

権威主義的態度と現代社会の社会現象

それでは、権威主義的態度と環境保護意識およびヘルス・コンシャスの関係からさらに社会学的示唆を導きだしてみよう。ここでの分析結果は、現代日本社会において、権威主義的態度がいかなる方向に人々の行為を力動し、いかなる社会現象の動因となっているのかという点について一つの可能性を指摘するものである。つまり、昨今急速に社会現象として浮上してきた環境や健康に対する関心の高まりに対して、権威主義的態度が一定の心理的動因を提供していることが明らかになったのである。

そしてさらに興味深いことには、権威主義的性格は、一見類似した社会現象にみえ、事実、正の相関関係が検出された環境保護意識とヘルス・コンシャスに対して、全く逆の心理

的動因を提供している。つまり、ヘルス・コンシャスに対しては権威主義的傾向は正の動因となっている一方で、環境保護意識に対しては、対極の自己－指令性（反権威主義）が動因となっていることが示唆されたのである。これらの関係にはさらに（必ずしも強引で飛躍的なものではない）解釈を施すことができるだろう。つまりこういうことである。

まず、権威主義的態度と環境保護意識の関連についてであるが、これは、自己－指令的志向性という、現代社会を生きる人々の、主体性と公共性を追求するひとつのエートスと環境保護意識が整合的に合致していることを示している。環境保護という課題は、まずマクロな視野に立って現状を認識し、公的な利害を尊重する動機によって遂行されるものである。したがって、そうした意味では自己－指令的志向性と環境保護意識のこの関係は実感としても納得のいくものである。また現代日本社会では、伝統的保守傾向は工業主義的な価値と融合していることが綿貫によって実証されているが（綿貫：前掲論文）、ここで検出した環境保護意識と権威主義的態度との関係は、このような状況を反映し、「権威主義的傾向→伝統工業的価値→環境問題についての希薄な関心」という関係の存在を傍証しているとみることもできるだろう。

次に、権威主義的性格とヘルス・コンシャスの関係について考えてみよう。原典によれば、権威主義的性格は、サド・マゾヒズム的性格を基軸として、様々な表出的特性を付帯するものとされる。そしてさらに、ここで測定した権威主義的態度も、特定の価値の盲信、禁欲主義、攻撃性を反映したものであることは容易に知られるであろう。こうした権威主義的性格の本来の傾向が、権威主義的態度とヘルス・コンシャスとの関係を生起させているとは考えられないだろうか。つまり、具体的に依拠すべき外的で強大な権威の対象や、サディズム的な攻撃の対象が巧妙に隠蔽されている現代社会においても、権威主義的傾向は、人々に何らかの行為としての表出対象を希求させる動因となる。そして、社会的な価値として喧伝されるに至った健康の維持・増進がこの動因と適合し、人々を自らに禁欲的制約を課す、ヘルス・コンシャスへと向かわせていると考えられるのである。このことは、ヘルス・コンシャスの高まりという極めて「健全」に見える現象が、実は必ずしも「健全」とは言い切れない、権威主義的傾向から心理的動因を獲得しているという、パラドキシカルな実態を暴いている。

また、現代日本社会では、伝統的権威や政治的権威あるいは宗教的権威が複雑な形で交錯することによって拡散し、人々の権威主義的傾向が求める、分かりやすい権威（あるいはその裏返しである排外的攻撃）の対象は、スポーツ選手などを除けば、もはや見出すことは難しい。こうした状況において、権威主義的態度が健康を志向して自らを律する方向へ人々を動員し、いくぶんでも狂気のガスをぬいているとしたら、

いかにも現代的な「自由からの逃走」のメカニズムといえないだろうか。

そして最後に、環境保護意識とヘルス・コンシャスの整合的な関係が示唆するものを考えておきたい。権威主義的態度を中心として考えれば、この両者の関係は当然、ヘルス・コンシャスの傾向が強いほど環境保護意識が低い、というものであるはずである。しかし、実際はそのような単純な構造で環境保護意識と、ヘルス・コンシャスが結びついているわけではない。この結果は、権威主義を取り巻く現代日本社会の現状が、往時ほど一元的な（それゆえに粗暴な）事態ではなく、はるかに複雑・多様で一見、捉えにくくなっていることを端的に物語っているといえるだろう。

結語と今後の課題

この小論では、権威主義的態度、環境保護意識、ヘルス・コンシャスという三つの社会的態度を操作して、これらの間の基礎的な構造を確認した。そして、大衆社会論の古典的命題を、現代の社会意識論として再定式化する糸口を模索する試論として、一定の示唆をもたらし得たものと考えている。

今後の課題としては、まず、この小論で詳述しなかった、環境社会学、保健社会学、あるいは健康についての諸研究に関する知見を深めることが必須であろう。また、ここでの分析結果をより確実なものとするためには、因果的な構造を分析することも必要となるだろう。

注①具体的にはナチズムをはじめとするファシズム運動、左翼的権威主義、エスノセントリズム、人種排外性などが扱われている。

②誤解のないように強調しておきたいが、ここでは決して、現代日本社会においては反民主主義的な社会事象などは存在しないと強弁しているわけではない。こうした問題は確かに存在するが、事態はもはや往時ほど単純で暴力的なものではなく、はるかに多様かつ潜在的で、巧妙に隠蔽されたものとなっているということを指摘したいのである。

③さらに付帯的には、社会現象として表出的な共通点を見出すことができ、同時に態度としてのパーソナリティにおけるフェーズも共通する環境保護意識とヘルス・コンシャスの二概念間に、どのような類似性が検出されるかという点にも関心がもたれる。

④すでに拙稿（吉川：前掲論文）においては、先行諸研究における尺度構成との整合性を検討した上で、ここで扱うのとほぼ同一の態度尺度の形成過程を詳細に測定している。

⑤二概念の間の因果的効果の大きさを推定する（単）回帰分析の場合は、相関係数と標準回帰係数は同値となるため、図1における相関係数を因果的効果の大きさと解釈しても不適切ではない。偏相関係数と回帰係数の間にはこうした単純な関係はないため、図2で示した、社会的属性の影響をコントロールした上での因果関係については、厳密には

いうことはできないが、二概念間の純粋な共変動を意味する偏相関係数は、因果関係がその実質的な根幹をなしていると判断できるだろう。さらに操作上はここで想定しているのとは逆の因果関係を考えることも可能であり、場合によっては重要でありうるが、この研究においては環境保護意識やヘルス・コンシャスが権威主義的態度に影響を与えるという可能性は理論上考えにくいと判断している。

参考文献

Adrno, Theodor, E. Frankel-Brunswik, D. Levinson and R. Sunford 1950 *The Authoritarian Personality*, Harper & Row.（＝部分訳　田中義久、矢澤修次郎、小林修一『権威主義的パーソナリティ』　青木書店、一九八〇）。

城戸浩太郎・杉政孝　一九五四　「社会意識の構造」『社会学評論』四：七四〇-一〇〇。

吉川　徹　一九九二　「社会階層と『自己-指令的』態度の形成」『ソシオロジ』三七：二、四五-六〇。

Kohn, Melvin 1981 "Personality, Occupation, and Social Stratification: A Frame of Reference", *Reserch in Social Stratification and Mobility* 1: 267-297.

Kohn, Melvin and C. Schooler 1983 *Work and Personality*, Ablex.

園田恭一　一九九三　『健康の理論と保健社会学』東京大学出版会。

曽良中清司　一九八三　『権威主義的人間』有斐閣。

田中　滋　一九九三　「河川の環境社会学へ」『ソシオロジ』三八：二、六七-七四。

直井　優　一九九三　『学術用モニター・システムの開発』平成二年度～平成四年度科学研究費補助金研究報告書。

直井道子　一九八六　「直系家族における主婦の権威主義的性格」『社会学評論』三七：一九一-二〇三。

直井道子　一九八八「職業階層と権威主義的価値意識」『一九八五年社会階層と社会移動全国調査報告書　第2巻　階層意識の動態』一九八五年社会階層と社会移動全国調査委員会：二二五-二四二。

直井道子・徳安　彰　一九九〇　「政党支持意識」原純輔編『現代日本の階層構造　第2巻　階層意識の動態』東京大学出版会一四九-一七二。

Fromm, Erich 1941 *Escape from Freedom*, Holt, Reinhart and Winston.（＝訳、日高六郎『自由からの逃走』東京創元社、一九五一）。

綿貫譲治　一九八六　「社会構造と価値対立」綿貫譲治、三宅一郎、猪口孝、蒲島郁夫編『日本人の選挙行動』東京大学出版会：一七-三七。

（きっかわ　とおる・大阪大学人間科学部助手）

付表１－１　権威主義的態度の主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率%
第１因子	3.012	50.2
第２因子	.765	12.8
第３因子	.660	11.0
・・・・		
・・・・		
・・・・		
計	6	100

付表１－２　権威主義的態度の主成分分析の結果

変数名	第１因子に対する負荷量
A－a	.723
A－b	.761
A－c	.767
A－d	.599
A－e	.692
A－f	.688

付表２－１　環境保護意識の主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率%
第１因子	3.140	62.8
第２因子	.960	19.2
第３因子	.397	7.9
・・・・		
・・・・		
計	5	100

付表２－２　環境保護意識の主成分分析の結果

変数名	第１因子に対する負荷量
E－a	.292
E－b	.832
E－c	.892
E－d	.909
E－e	.861

付表３－１　ヘルス・コンシャスの主成分分析の結果

因子	固有値	寄与率%
第１因子	3.666	73.3
第２因子	.555	11.1
第３因子	.354	7.1
・・・・		
・・・・		
計	5	100

付表３－２　ヘルス・コンシャスの主成分分析の結果

変数名	第１因子に対する負荷量
H－a	.749
H－b	.895
H－c	.906
H－d	.870
H－e	.852